

五、日留利分教場はもと駒ヶ根市中沢の吉瀬と合同して日化学校と言っていたが後に吉瀬と離れて南向の分教場となり更に昭和二十四年飯島町の分教場となった。

六、この時の村長寺平幾次郎翁は、もと学校教員時代の教え児によって東の丘の上に歌碑を建てられている。

。 浮きたる心の塵も沈むべし

澄みわたる月に向えば

これとならんで御歌所寄人であった飯沼の遠山英一翁の歌碑がある。

。 きみおみの道のみだれぬわが国は

たぐひなき国ほこるべきくに

またこの南に、もと南向小学校長であった桃沢虎雄先生の歌碑が

大草城史の研究(梗概)

松村 弥次兵衛

今から卅年前……丁度富田県知事の頃で、信濃宮建設のため県下あげてその運動に参加した時であり、県下の小中学生、高校大学は勿論のこと各層その建設資金に奉賛し、また現地に宿泊してその敷地、参道建設に奉仕をした。私はその頃丁度南向小学校に勤めてい

ある。

。 朝空を群れし鳥らあわわと
地に影ひきて飛び去りにけり

七、石神坂に養龍所竣工の記念碑が南方を望んで建立されたが戦時中供出してしまい、台柱だけがいつまでも残っている。その台柱が昔を想はせるが何だか淋しい。しかしその西の林叢中に養蚕、蚕種の功労者吉沢千賀太郎翁の頌徳碑が残っている。石の碑であるため災厄をまぬがれた。

八、教室のまん中に柱があり、障子戸であった教室が此の頃から硝子戸となり漸次近代化してゆく端緒となった。

(筆者 中川村北林)

て、市村威人先生のお伴で福島豊、宮下操、日下部新一先生などと鹿塩、大河原方面の調査に行った事があった。又南向の大草城址にいくどか先生が御出でになり、その都度直接指導をして戴いたり、先生の書かれたものなどを参考に、昭和十七年二月『大草城史

の研究』として四十二頁謄写印刷にして百卅冊同好の士に配った。

その頃学校の職員に、村の翼賛壮年団の総会に、上伊那南部教員会の総会にも話したことがあった。それを今年七月南向郷土研究会の依頼でその集まりにお話をしたのでそれをここに載せる事にする。

もと県議をされた南向の高坂広平さんの御宅には『至誠帖』というものがある。そのことがきに、

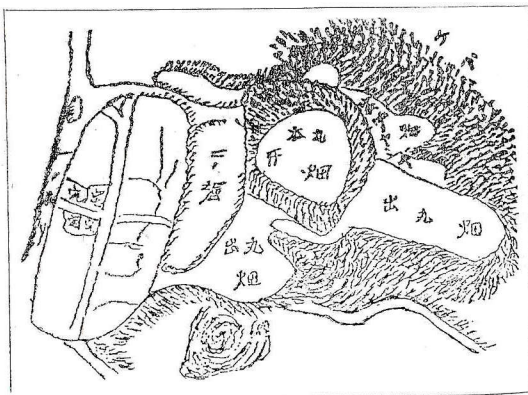
今年六月宮中月次御歌会に宗良親王御題にて歌召させ給いければ其歌進者をはじめ信濃にゆかりある人々の歌をもこひて帖となし、同親王を祀れる大河原の古祠へ奉納したりき。抑親王は征東將軍の職を帯びさせ給い我信濃國御下向ありしは異國のはじめにして天授六年迄凡四十年間此の大河原を根拠地と定め給ひて各所に転戦し給ひき。この長年月一日の如く無二の忠を尽して親王に仕へ奉りしは高坂高宗なること国史に炳也。ここに謙輔ぬしはこの高宗の末裔なりと云ふ。代々土地の素封家をもって称せらる。氏も亦勤王愛國心に富めり。今その邸内に同親王を奉祀し英靈を奉慰するあらんとききて大河原の古祠へ奉納せしものとおなじき帖をつくりておさむることとはなりぬ。

明治三十四年八月

御歌所録事

源英一 謹書

このことばがきは御歌所寄人の南向出身の遠山英一さんの書かれたものであり、中には沢山の方々の御歌が記された立派なもので



大草城址の図

ある。大草城址の図は写真として残されたものであり、二は今のは故人となつた、高坂徳風、寺平幾次郎、安富熊次郎翁におききて(昭和

和十六、七年の頃) 作製したものである。城の西は天龍の清流にのぞんだ崖、南と北は深く切れた豁谷にのぞみ東方の平地につづく所は二条の堀切で遮断し、本丸(宇古城)は方三十間位の広場、其の南面に帯郭があり、北方に一段低く二の丸(宇下城)がある。小城ではあるが頗る要害で如何にも美しい感

外にもやしろ・勝城・鎌倉塚・香場・殿屋敷・大門・的場・矢平日影・宮ヶ原久保・宮ヶ原北・宮ヶ原日影・永楽田等々沢山あげることが出来る。又寛永元年不動尊と共に南向葛島延寿院に遷座されて崇敬されている大日如来は楠正成、正行両公が戦死さるゝや一族の楠左衛門尉正勝が再奉を圖り正平七年宗良親王の信州下向の御跡を察い、身を山伏に委じ楠氏の守本尊たる大日如来を笈に納め遠州より天竜川に沿いて飯田に來り、飯田楠木と名乗り天下の形勢を觀望した。偶々宗良親王が大河原に立て籠らせ給うと聞くや之に馳せ参らんと、飯田を出発して大河原に向いようやく此の堂ヶ萱に辿り着いた。ここに不動尊を奉祀せる一つの堂があつて通行の人達は茲に休息し旅路の平安を祈るを常とした。正勝は笈を解きて暫くここに逗留して通行人の様子を探り、ここにて同志を募らんとしたるも志を得ず終に病を得て空しく此の地に歿した。また黒牛部落にある觀世音菩薩は伊那二十三番目の札所の一つになっているが、伝うる所によると吉野朝時代大河原に駐ませられた宗良親王に奉仕せる武士が故あつて山伏姿となり、世を忍んで觀世音菩薩の像を奉侍して大河原より四徳を経て黒牛に來り、茲に一字の堂を構え觀音様を安置したと云う。又其の念仏も同地に現存しているが、殆んど他に類例なく而も今京都に残存して居るものと同一なりと云う、(大日如来と觀世音菩薩の項は南向村誌より)

四、古文書に就いて

1. 香坂宗種文書
『小笠原殿国もちをおうりやう被成候今度郷の者七ツハツ一揆の組をたて申候条殿もくみに被成候如件
永享四年十一月
中沢齋尉尉花押
香坂宗たね殿』
縦九寸四分、横四寸端紙にてほんとうの走り書で密書の如きものである。今から五百四拾年前、其の當時としては上下伊那唯一の室町時代の文書と市村先生は言われ、私の発見した當時は知事以下大吏の喜び様であり、此の文書については昭和十七年『信濃』三月号に詳しく市村先生により報せられている。

2. 北条氏直文書

其表及勢遣候処早々忠信感悦候弥向後別而走廻專一候猶安房守可申候 恐惶謹言
九月十二日(天正十一年) 氏直(花押)

大草休斎

安房守は氏政の弟氏邦で氏直の叔父に當る。休斎の孫石近、宗澄は真田安房守幸昌の扱いた時家康の命により出陣した。香坂氏は代官をしていたが、宗久の時帰農して郷士となり飯綱山の神社を建立した(天正)がある由。

北条、徳川が和議を結んで、川中島を除く全部が徳川領となった。天正十三年八月上田真田昌幸が抜き香坂氏も出陣した。宗種は結城

合戦に功あり、大草地頭職を賜わった。

三河秋葉神社に奉納した大草休斎起請一紙に家中衆片桐、大島、市田、等各村に散在とあり。

3. 諏訪御符礼の古書には、大草香坂左衛門有宗寛正七年(五〇七年前)、大草民部少輔宗政長祿二年(五二五年前)、大草沙弥昌広文明九年(四九六年前)。

4. 下久堅村平沢家・大下桑村金田家には慶長元和頃の香坂七郎右衛門の名のある年貢割付帖、曾濟目録がある。

5. 南向村(現在は片桐村と合併、中川村と云う)の常泉寺所持香坂何右衛門文書、

宗邦—宗公—宗継—宗壽

宗種(大草城主、五四〇年前)—宗職—宗次—宗縁(休斎のこと、大草五四〇年前)—宗登(高坂彈正の三男)—宗親—宗久

。高坂家の墓地には室町時代の五輪塔がある。

。岩村田高女、岩崎長恩先生が北佐久三井村牧の島の香坂氏の御研究の非常に詳細な本がありとかの由であるが、私は不勉強で拝見してない。鹿塩、大河原には両姓がないとの事である。昭和十七年私が此の研究をした時には、上伊那郡に、香坂三、高坂が四十九戸あった。(昭和四十七年十一月二十一日記)

(筆者 飯島町七久保)

以上

内府様被仰付候 合六石者常泉寺

右前々御寺領之内にて、永代全可被成御所務者也 仍如件

香坂何右衛門尉昌吉(花押)

慶長六年七月十七日

御納所御中(鹿塩、大河原にはこうした文書なし)

。何右衛門、恐らく菅沼小太膳定利の代官、八幡社、諏訪社へも六石宛奉納。

。慶長六年四月廿日、朝日受永同寺へ五石、黒印状。

郷土年表抄

明治一九年 一月 入学は年一回 六十八才 二・八 電信機城を
四月と学校令改正生徒は月二銭 般に公開 三月 県会議員選挙松
の授業料を納入することとなる 尾千振・樋口与平・北原信綱・
(一〇)年は一年生五銭、二年生 安東欽一郎当選 八・六 伊谷修
八銭、三年生十二銭、四年生十 下伊那郡長となる。
五銭となる(二・五 俳人井月歿)